粟田殿(係助)は、露台の(格助)外(と)まで(副助)、わななくわななく(副詞)
(サ変・用 完了「たり」体)おはし(ⓢ話し手→粟田殿 接助)たるに、仁寿殿(ひむがしおもて)の(格助)東面の(格助)みぎりの(格助)ほど
に(格助)、軒と(格助)等しき人の(格助)あるやうに(比況「やうなり」用 格助)見え(下二・用)給ひ(ⓢ話し手→粟田殿 ラ変・体 形・シク活用・体)
(補動)四段・用)ければ(過去「けり」已)、ものも(係助)おぼえで(接助)、「身の(格助)候は(四段・未)ば(ⓣ粟田殿→帝 接助)
(下二・未)こそ(係助)、仰せ言も(係助)承ら(四段・未 意思「む」已)め。」とて(格助 接助)、おのおの(副詞)
(ⓚ粟田殿→帝 (補動)四段・用 四段・用)たち帰り(四段・用)参り(ⓚ話し手→帝 (補動)四段・已 完了「り」已)給へ(ⓢ話し手→中の関白・粟田殿 (補動)四段・用)れば、御扇を
(四段・用)たたきて(接助)笑はせ(四段・未 尊敬「す」用)給ふ(ⓢ話し手→帝 (補動)四段・用)に、入道殿は(係助)、いと(副詞)
(形・シク活用・用)久しく見えさせ(下二・未 尊敬「さす」用)給は(ⓢ話し手→入道殿 (補動)四段・未 接助)ぬを、いかがと(格助)思し召す(ⓢ話し手→帝 四段・体)
ほどにぞ(格助 係助)、いと(副詞)さりげなく、ことにもあらずげに(形動・ナリ・用)
て(接助)、参ら(四段・未 (補動)四段・已 完了「り」体)せ(ⓢ話し手→帝 (補動)四段・未 尊敬「す」用)給へ(ⓢ話し手→入道殿 (補動)四段・已)る。「いかにいかに。」(副詞 副詞)と(格助)問は
せ(尊敬「す」用 (補動)四段・已)給へ(ⓢ話し手→帝 (補動)四段・未)ば、いと(副詞)のどやかに、御刀に(格助)、削られ(尊敬「る」用 四段・未)
(推量「む」体)たる物を(格助)取り具して(接助)奉ら(四段・未 (補動)四段・用)せ(ⓢ話し手→帝 (補動)四段・用)給ふ(ⓢ話し手→入道殿 (補動)四段・用)に(接助)、「こ
(係助)は何ぞ(係助)。」と(格助)仰せ(下二・未)らるれ(尊敬「す」用)ば、「ただにて(接助)
帰り参りて(四段・用 接助)侍ら(ⓣ入道殿→帝 (補動)ラ変・未)む(仮定「む」体)は、証(係助)候ふ(ⓣ入道殿→帝 (補動)四段・終)まじきに(打消推量「まじ」体 形・ナリ活用・用 接助)
より(格助)、高御座の(格助)南面の(格助)柱の(格助)もとを(格助)削りて((たかみくら)(みなみおもて) 四段・用)
(補動)四段・体)候ふ(ⓚ入道殿→帝 (補動)四段・体)なり。」と(格助)、つれなく(四段・用)申し(格助)給ふ(四段・用 (補動)四段・体)に(接助)、
いとあさましく(副詞 形・シク活用・用)おぼしめさ(四段・未)る。(ⓢ話し手→帝 尊敬「る」終)

粟田殿(道兼)は、露台の外まで、ぶるぶる震えて
いらっしゃったが、仁寿殿の東側の石畳みの辺り
に、軒と同じくらいの(高さの)人がいるようにお
見えになったので、無我夢中で、「我が命が
(無事で)ございますればこそ、
(帝の)ご命令もお受けできるできましょう。」と思
って、それぞれ
引き返して参上しなさったので、(帝は)扇子を
たたいてお笑いになったが、入道殿はたいそう
長い間、お見えにならないので、どうしたのかと思
いなさるうちに、たいそう平然と、なんでもない様
子で参上なさった。(帝が)「どうであった。どうで
あった。」とお尋ねに
なると、(入道殿は)たいそう落ち着いて、御刀に、
(刀で)削られ
たものを取りそろえて(帝に)差しあげなさるので、
(帝が)「これは何か。」とおっしゃると、(入道殿
は)「何も持たないで
帰って参りましたならば、証拠がございません
ので、高御座の南側の柱の下を削ってきました。」
と、平然と申しあげなさるので、
(帝は)たいそう驚きあきれたこととお思いになな
る。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/